

あんず

郡山市立高瀬中学校

「昨日のあれ、可哀想だったよねー」

女子高校生と思われる三人組がケラケラ笑いながら私の後ろを通り過ぎていった。本を借りる気もないのに図書館来んなっての。名前も知らない人間を横目で見て、また本に向き返る。こんなにも、本で溢れている聖地に来ているというのに駄弁って終わりなんて。春の柔らかな風に揺らされ少々乱れた髪を耳に掛けふつと息を吐いた。指先が本の背に触れたとき。

「あんず」

凜とした声が私、高坂あんずの名前を呼んだ。背後を振り返ると水色のシンプルな手提げ袋を持った、セミロングほどの長さの髪の少女が立っていた。

「泉、来てんだ」

彼女は末秋泉。小学校高学年からの友達で、中三になった今でも仲良くしてもらっている。私の数少ない、なんでも、とまではいれないが他の人間より全然自分のことを話せる友達。言わば親友、なのかも知れない。それは私見でしかないのだけれども。

「なあに、どうしたの」

小首を傾げ、無意識に泉を凝視していたらしい私に柔らかな声で訊いた。

「ごめん」

そう短く答えるとまた泉が口を開く。

「やっぱり家にいるより落ち着く」

「わかる」

「息苦しいんだよねえ」

肩を軽くほぐしながら重くて深いため息をつく。お疲れのようで。そう視線で伝えるかのように少しばかり目を細め泉を見つめる。家が息苦しい、私と泉だけが共有できる話題。

私たちには、父がいない。いや、私に関しては、長い間いなかった。が、血の繋がっている元父は、小さい頃死んだと聞かされ、それが嘘だと知ったのは一年ほど前だ。嘘偽りで固められた話を今まで盲信してきたのだ。馬鹿げた話。今では新しい父がいるが、私はこれっぽっちも関係し合うつもりは無い。何度か話したりはしたがどうも性格が相容れないようだ。無理に話そうとするとお互い喧嘩腰になってしまうし父の個人主義な態度がずっと気に食わない。

泉も私とはまた違った家庭の事情がある。母子家庭なのだが、ここ数ヶ月どこの馬の骨ともわからない男が家を出入りしているらしく、暗い顔をしていることが増え、いつ母が結婚すると言いつつ出するのかと思うと気がでない、と相談されたりした。私たちにとって家に居場所なんてない。ふう、と息をつける場所なんかじゃない。小学生高学年の頃、落ち着く場所はどこ？という質問で『家』と即答できるクラスメイトがどれだけ羨ましかったものか。今となってはどうでもいい事だけれど、同じような境遇にある人にしか話せない話だ。それは何故か。訳は私の苦い過去にある。

今よりも三、四歳ほど小さい頃、小学校は父の日ということで家族の話で盛り上がっていた。帰りの会を終え、帰り支度をする私のそばに元気でおしゃべりな子達が、

「あんずちゃんのお父さんって、どんな人なの？」

と聞いてきた。その目は一切の濁りのない綺麗な茶色や黒色で、気が付けば

「お父さんね、私がちっちゃい頃死んじゃったらしくって……」

と自虐的に笑ってみせてしまっていたのだ。

すると、グループの一人がこう言った。

『可哀想』

当時は、自分の答え方を陰で責め立てた。真実だと信じていた父の死。父の顔はわからないし名前すら、聞いても教えてもらえなかった。何も知らないのだ。悲しみもあつたが、思い出せるような思い出もなく、自身特に気にはしていなかったと思う。だが、可哀想、なんてトゲのあるような言葉をかけられて心を掻き乱されたようだった。苦しい。辛い。なぜ、可哀想と知った顔をして言うの。どうして、哀れみの目で私を見るの。なぜ、どうしての繰り返し。可哀想なんて言わないで、哀れみの目で私を見ないで、わからないくせに同情しないで。こんな感情を誰に向ければいいのか、分からない。どんな人と、どんな話をすれば可哀想なんて思われないのか。口を開けば愚痴や弱音が溢れ出てくる。人間の汚い部分が、見える。自分の、友達の、先生の、家族の。全部が全部、嫌になった。可哀想と言われたこの時から、卑屈な人間になったのだ。もう、人前では父がいけないことなど絶対に話すものか。これ以上哀れみの目を向けられたら……うん、考えるだけで気持ちの悪い何かがこみ上げてきそう。私は、何かを見下して偽善者になる「可哀想」が大嫌いだ。そんな私を分かってくれたのは泉。彼女だけだった。

「あんず」

名前を呼ばれいつの間にか俯いていた顔を上げた。

「そんなに怖い顔しないで。大丈夫、私がいる」

そんな言葉に思わず目の前が霞む。自分を肯定された気がして、嬉しかった。柔らかに微笑んでいるであろう泉の顔がまともに見えない。ああ、私幸せなんだ。理解してくれる人がそばにいる、周りから向けられる棘を受け止め合える、味方がいる。可哀想と言われた時が絶望的な海の底だとしたら今はなんだろう。ハッピーエンドが約束された友情漫画の主人公だろうか。嬉しさが溢れて口元の笑みが浮かぶ。ふわっとヒヤシンスの甘い香りが私たちの鼻をくすぐった。ふと空を見上げる。……いい天気だ、ずっとこのままでありますように。そんな私の小さな祈りは儂く散っていった。きつと幸せになった、罰なんだ。

今日は土砂降りの雨。台風が近づいてきているらしい。この時期に。

「おはよう」

半径五メートルの人にしか聞こえないような挨拶をして教室に入り自分の席に向かう。別に返す人なんてたまにしかないがA型の特徴なのか、なんなのか、いつも欠かさずしている。当たり前と化した今となつては、苦にさえならない。はずだったのに。

「おはよう、あんず！」

「あんずちゃん待ってたよ！聞きたいことがあるんだ！」

流行に敏感で女子力と言われるものを体得している、いわゆるキラキラ女子が私を見つけると以前まで話していた話を打ち切りやって来た。地声より高い声で楽しそうに話している。朝からそんなテンションなんてすごい、尊敬するわ……。心の中でつぶやきながら賑やかなみんなと会話のキャッチボールをする。愛想の良い笑顔貼り付けて。

「えー、なににな？」

自分の席に鞆を置き、引いた椅子に腰を下ろす。彼女達の口から出てきた言葉は簡単に私の顔から笑顔を引き剥がした。

「あんずちゃんって、血の繋がってるお父さん死んじゃってるんでしょ？」

ドクン、心臓が破裂して死んでしまうのではというくらい息が出来なくなった。え？なんで、中学で初めて顔を合わせたあなたがそのことを知っているの？誰の声も頭に入ってこない。右から左に通り返けていく。目の前も何も見えない。かろうじて人間のシルエットだけは確認できるが。どこからその情報を得た？風が強まり窓がガタガタと不快な音を奏でている。今すぐに問いただしたくなる気持ちを必死に抑えた。

「え、何でみんなそれ知ってるの?!へへ、実はそうなんだ」

もしかしたら顔が引きつっているのかもしれない。汗をだらだらかいているかもしれない。でも今はそんなこと気にしちゃいけない。嘘でも何でも笑顔でいなければ。笑顔でいればきつとあんな言葉はかけられずに済むかもしれない。もう、聞きたくないんだ。笑顔を貼り付けてから何秒経ったのか、もしくは何分何時間だろうか。それくらい長く感じる。早く、早くどこか違う場所へ行つて。頭が悲鳴を上げそうになったとき「おはよー!」

泉だ。無意識に救世主が来てくれた、そう思った。ガタンッ、と大きな音を出して立ち上がる。

「泉おはよう!」

ねえ泉、私ちゃんと笑顔だよね?私の心中を瞬時に悟ったのか泉は私たちの輪に入ってくる。

「ねえねえみんな、新作のポッキー売ってたからつい買っちゃただけど一緒に食べない?」

「泉ちゃんありがと!これ気になってたんだあ!」

泉はにっこり微笑んで、あんずまだ教科書とか準備できてないしこつちの机で食べよ、と斜めの席にみんなを誘導した。私の席から遠ざかる背中を見つめる。私の家庭の話はもうどうでも良くなっただろう。ありが

とう泉……九死に一生を得たような気がする。自分の手に視線を落とすとスカートをこれでもかというくらい握り締めていた。あーあ、しわくちゃ。手もじんじんするし。それ以上に頭が痛む。泉のおかげでこれだけで済んだよ。

「お主はヒーローやで……」

なんて冗談をぬかすと

「立ち位置レッドじゃなくてグリーンなんやけどな……」

と言いながら私の右手を包み込んだ。泉の手から伝わってくる温かさが痛みを緩和してくれたのか、自然と笑みがこぼれた。

「キーンコーンカーンコーン。それじゃあまた後で」

そう言つて泉は自分の席へかけて行つた。寂しくなった右手をじつと見ながら席に着く。

温かかったな。なんで父のことが知られてしまったのだろうか。どこかで繋がっているのか女子の伝播性といったら、侮れない。秘密ね、内緒ねなんてお決まりのように言うくせに、次の日には女子の中で広まっている。何が秘密なのさ。面倒臭いなあ……?そんな事を考えていたら授業内容なんて頭に入るわけもなく、あつという間に一時限目は終わった。しまった、苦手な数学だった。ちゃんと話聞いてても私には理解しがたい存在なのに、やってしまった。ずうん、と肩を落とす。仕方ない、家での復習はしっかりやろう。そんな事よりもまずは泉と話したい。二限目の教科書を机に置き、泉の席へ急いだ。泉も教科書を机に開き私の方に向き直つた。有難いことにうちのクラスは元気の良い人が多く、休憩に入るとワイワイガヤガヤ。先生達からは「学校名物動物園」と言われるほど。だから他の人に聞かれたくない話であつても周りには聞かえやしないから教室で話すことが出来るのだ。

「……お父さんのこと?」

口火を切つたのは泉だった。やっぱり分かつてるよね。さすが、と心の

中で感嘆する。

「うん。どこから聞いたのかわからない」と

と答えると女子ってそういうの好きだよ、と眉を下げた。いつの時代でも噂話とは美味しいもので。何の変哲もない日常に飽き飽きしてお腹を空かせるから、余計他人の不幸、甘い蜜を求める。そんな気持ち、分からなくもないけど私はいらぬ。何の変哲もない日常がどれだけ幸せか知っている。つもりだから。みんなだつて性格が悪いわけではない。ただ、あたり前のありがたみが分かるような出来事をまだ体験してないから。日本という国は幸せすぎるんだ、その為にあたり前のありがたさを忘れてしまう人間がでてくる。幸せすぎるのは、人をダメにします。これは罪なのか。

「あんず？」

「あ、ごめん」

「もし、またなにか考えすぎてたんじゃないの？」

むう、と唇を尖らせまあんずらしいけど、と続けた。考えすぎなのか、そんなことないけどなあとふわふわ考える。ああ、そうだ、私が今考えるべきことはお父さんの事だ。今は女子達が聞きにこないから安心だがこれから先また聞かれるかもしれない。可哀想なんて言われぬような答え方をできるように、対策しなきゃ。絶対に、嫌だから。泉と少し話し込んだところで先生がいらつしやつた。クラスメイトたちは蜘蛛の子を散らすように自分の席へ向かう。そんな人の波に乗るようにして私も席に着いた。ふと視線を外へ向けるとグラウンドに大きな水溜りを作つた雨は、嵐の存在をチラつかせながら徐々に徐々に強くなつていった。そんな光景を眺めていたのは私だけではなかった。

間休憩に入った。泉の席へ行こうと席を立つと、私の前に関崎さんが立っていた。

「えつと」

「高坂さん、話があるんだけど、いいかな」

「あ、うん」

控えめな印象の彼女は眼鏡のレンズ越しに私を見つめてから歩き出した。教室をあとにする。関崎さんはどこへ行くつもりだろう。話つてなんだろう。大人数で戯れたりしない関崎さんと話すのはこれが初めてだ。胸がドキドキする。関崎さんは階段の端のほうに座り込むと少し隙間を開けた隣をぽんぽんと叩いた。座つて、つてことだよ？素直に応じる。「それで、話つて？」

そう切り出すと関崎さんはあのね、とおずおず話し始めた。

関崎さんが教室に戻つてから、少し時間を開けて教室に戻つた。教室のドアを開けると泉が駆け寄つてきた。

「あんず！関崎さんと何話してたの？」

私と関崎さんが一緒に出て行つたのを見ていたらしい泉は何故かひどく心配している。

「ううん、大した事じゃないよ」

そう微笑むと泉はそう？といつてそれ以上は聞いてこなかった。私、少しづつ嘘が上手くなつているかもしれない。関崎さんとの話の内容は大した事だった。泉になら大体の事は話せる。一番の理解者であり、親友だから。だけれど、泉には話せなかった。私、泉を裏切つてしまったのかな。地に足がついていない感覚を覚え、ふらふらしながら席に着いた。関崎さんの口元には薄い笑みがあったこと、泉が関崎さんを睨んでいることなんて、知らなかった。私はただ、関崎さんの話を理解するのに必死だった。

「いっばいっばいだよ……」

そんな私の小さな泣きは誰の元へも届かなかった。

家に着くと、テレビで最近高校生に人気のタレントがアフリカの開発

途上国へ行き、現地の人々の暮らし方を調査する番組がやっていて。やはり暮らし方は日本と違うところが多く、なるほど、と頷いてしまうほど画期的なものもあった。調査は良かった、タレントは現地の人と楽しそうに対話していたし暮らし方の工夫がよく分かった。ただ、一つだけ気に入らないところがあった。それはスタジオの大御所タレントが調査映像を見て言った一言だ。

「可哀想ですよ」

そう言ったのだ。何が可哀想なのだ。現地の人々は自分達が可哀想と思っていなかったし、自分達の暮らしに満足していた。生き生きしていたのに。大御所タレントは何を考えて可哀想と言ったのか。ふつふつと怒りが湧き上がる。何かに対して可哀想と言えば自分は共感してあげて優しい、いい人だと思える。または可哀想と思うことで自分はそれらより上だ、裕福だ、幸せだと思える。結局、可哀想という言葉は言った本人の自己満足でしかないのだ。そう考えると可哀想という人が憎たらく思えてしまう。私がひねくれてるのは承知だが、どうも可哀想という人はいけ好かない。

翌日、嵐。地面を激しく打ち付ける雨。所々から聴こえてくる雷の音。飛ばされてしまうのではないか、と思うほどの強風。酷い荒れようだ。傘を盾のようにして一步一步慎重に学校へ向けて足を進めた。教室の前まで来ると、いつもより騒がしいのが察してとれた。どうしたのだろうか。多少気になりはしたものの、昨日の関崎さんのこととは比にならなかつた。軽く身だしなみチェックをし、教室へ入った。

「おはよう」

そう言うときクラスのみんなが一斉にこちらを見た。何事。そして口々に話し始めた。

「ねえ、あんずのお父さんって死んじゃったの?!」

「今は新しいお父さんいるんでしょ?」

「ねえどんな感じ?優しい?かっこいい?いいな、新しいお父さん!」
え、え?なんでみんなが知ってるの。昨日の朝まで元父のことを知っていたのは女子の数名。たしか五人だった。それなのに。なぜクラスメイト全員が、今の父の存在まで知っている?!やめて、いいなんて言わないで!!何がいいの?!私が驚きで口をパクパクさせていると、私が嫌いとしている言葉が降り掛かってきた。

「可哀想だね」

一気に頭に血が上る。

「なんなの?!なんで可哀想なんていうの?!どこが可哀想なのよ!」
声を荒げて睨みつける。もう今までの建前なんて知らない。何が可哀想なのかはつきりさせてよ。

「私はちっとも可哀想じゃないんだから!」

クラス中が水を打ったようにしんと静まり返り、静寂が肌に痛い。耐え切らなくて苦しいから、踵を返して廊下へ出た。教室になんて戻りたくない。

それからは何をすることも上の空で。絶望だった。どこか遠くへ行きたい。もう、消え去りたい。自ら居場所を失ってしまったのだ。そんな私を見かねて心配した先生が

「早退しろ、疲れてるんだらう。」

と言って職員室へ戻っていった。正直もういっばいいっばいだから有り難かった。少しほっとしながら帰り支度をし、教室を出た。その際関崎さんと泉の視線がぶつかった。申し訳なさそうな表情の関崎さん。心から私を心配してくれる泉。ちゃんと笑っていたかどうか分からないが軽く手を振ってから職員室に向かった。職員室の前まで来ると迎えに来たのである母が私を見つけると駆け寄ってきた。

「あんず、大丈夫?家に帰ったらすぐに休みなさい。頑張りすぎたのよ、きつと」

母が私のことで心配してくれている。素直に嬉しかった。私の母だ、新しい父が来たせいでここ数ヶ月ずっと寂しかった。けれど今は私だけを心配してくれている。軽く笑みを浮かべて

「うん」

とだけ返事をした。先生が職員室から出てきてお大事に、と言ってくださった。そんな先生にお辞儀だけしてその場をあとにした。

家へ向かう車の中で。

「あんず、最近なかなか話せなくてごめんね。」

母はミラー越しに私をチラッと見て、申し訳なさそうに眉尻を下げた。私は別に、とだけ短く返事をして、外の景色に目を移した。ひどい雨。登り坂になっている道路は軽く川のように見える。脇の川もかなり増水していて見えてハラハラする。

「ねえ」

母がまた口を開いた。川をぼーっと眺めながら耳だけを傾ける。

「あんた昔から一人で抱え込みすぎって言うか、考えすぎって言うか……人一倍無理しすぎちゃうところあるのよ」

「……」

「今もきつと何か抱えてるんだよね」

「すぐく、すぐく優しい声色で母は続ける。」

「だからね、いつも心配するわよ。周りに迷惑かけたくないって、あんなのいい所よ？ だけど、たまには思うままに発言したり行動していいんだからね」

赤信号で車が止まった。母はくるっと顔だけ振り向かせて私の大好きな、優しい笑顔で

「お母さんは、いつだってあなたの味方よ」

目頭が燃えるように熱くなった。母の愛情、私が欲しかった言葉、胸に強く高く響いて涙が溢れた。抑えることなんて出来ず車が発進しても私

は家に着くまで嗚咽を漏らしながら涙を流し続けた。

「それじゃあ、ゆっくり休みなさいよ」

そう言って母は私をベッドに寝かせリビングへ戻っていった。相手が母であれ、あんな姿を見られるのは恥ずかしかった。ベッドの中でもぞもぞしながら関崎さんの話を思い出す。

——『高坂さんの両方のお父さんの話、私全部知ってるの。死んだって言ってるけど本当はそうじゃないこと。そして新しいお父さんがいること』……『え』……『なんでだと思ってる？』……『末秋さん』……『泉……？』……『んー、まあ、そんな感じ』……『泉が、関崎さんに、全部話したの？』……『さ、どうでしょう？』……『明日は厄日だよ。じゃあね』……『あ、待つ』——

「……嘘だよ、泉？」

私の小さな泣きは誰の耳にも入ることなく空気に溶けて消えていった。ピロン。メールの着信音で目が覚めた。あれから何時間たったのだろうか、気付いたら眠っていたらしい。現在の時刻は七時十分。メールの送信者は泉だった。部活終わって帰ってきたんだ。開くことにほんの少し躊躇したが、私にとって泉は唯一無二の親友だ。意を決してメールを開く。と、そこには【具合は大丈夫？私、何でも話聞かから。明日、学校来たら話そう】という内容だった。何でも話聞かから……話していいのかな、関崎さんとのことを。私は関崎さんよりも泉を信じたい。泉は勝手に私のことを人に話したりしないって。だから。明日泉に話してみよう。ありがとう、返信しました眠りについた。

夢を見た。父のことをクラスみんなに知られ、可哀想とたくさん言われる、私の望まない夢を。汗をたくさんかいて唸りながら目が覚めた。息がたえだえになる。大丈夫、こんな結果にならないから。そう自分に言い聞かせて、ベタベタする体を洗うためシャワーを浴びた。身支度を整え、ご飯を食べ学校へ向かう。頬をばん、と叩き気合を入れる。思っている事を、ぶつけるんだ。始まりのゴングは、とつとつに鳴っている。

……今日が、決戦だ。学校へ着くと既に泉がいた。そして関崎さんも。「おはよう」

と挨拶を交わし、私は泉の下へ行く。話をしようと口を開くと

「関崎、こっち来て」

泉は関崎さんを関崎と言ひ、少し厳しい口調でこっちに来るよう、呼んだ。目を見開く私を尻目に、関崎さんはわずかに嫌そうな顔をしながらも素直に近づいてきた。「……」どうしよう、まさか三人だとは思ってなかった。……でも、決めたんだ、思っていることをぶつけるって。「関崎さん、本当に泉に聞いたの？」泉の頭上にはてなマークが浮かぶ。

「泉じゃないんだよね」

「……いつ泉なんて言ったかしら。私は末秋さんとか言っていないのだけれど」私、泉だったらわざわざ末秋さんだなんて言わないわぐとため息混じりにつぶやく。はて、さっぱり分からない。関崎さんの言う末秋さんは泉じゃない。じゃあ、誰？私の過去を知っている末秋さん……末秋……！

「末秋雅人！」

あいつだ。小学校時代のクラスメイト。あいつは人一倍噂話や他人の話が大好きでおしゃべりだ。あいつなら話しかねない。

「……何の話をしているの？」

いまい話についてこられていない泉が首をひねる。事の経緯を簡潔に伝えると眉間にしわを寄せると

「関崎、紛らわしく言わないでよ。伝わりにくいでしょう」

こわばっていた肩を落とし苦笑いしながらそう言った。

「ごめんなさいね」

関崎さんもそう言ってふふと笑った。初対面ではないような二人の関係性は何だろう。泉、関崎と呼び合う仲なのだから昔からの仲なのか？そんなことを考えていると察した様子で泉が私たち従姉妹なんだと教

えてくれた。なるほど、従姉妹でしたか。今は特に関係ないことだけど気になってしまうもので。

「で、話戻るけどその雅人っていう人があんずのことを関崎に教えたってこと？」

「そう」

「でほかの人たちにも教えたの？」

「なんじゃない？」

「その雅人って人はこの学校の人じゃないよね。他中なのに何でうちのクラスメイトと接触があるのよ」

確かに。雅人は他県の中学校に進学したし、少なくとも近くにはいないはずだ。まあ、今更クラスメイト知られたのに雅人見つけたって意味無いし放っておこう。今は、クラスメイトとの関係修復の方が大事だ。

「先生に、協力してもらえばみんなに伝えられるんじゃない。あんずが思っていること」

「帰りの短学活とか、かしら」

泉と関崎さんも方法を一緒に考えてくれている。それがなんだか嬉しくて、幸せを感じた。ここまで来たらもう思いの丈をみんなに伝えるしかないよね。もう、閉じこもらない。みんなに本当の私を知ってもらおう。

「今日、先生に相談してみる。私、頑張るから」

二人の瞳をしっかりと見つけてそう言うと、熱い眼差しで見つめ返してくれた。私、やるよ。変わるんだ。

「えー、短学活はもう終わりなんだが、今日は高坂からみんなに話があるそうなんだ。しっかりと聞いてくれ。高坂。」クラス中がざわつく。そりゃあそうさ。昨日怒りに任せて声を荒げてしまったから。それもすっかり謝ろう。席を立ち教壇の前に出る。一度目を閉じて浅く呼吸を整える。一つ一つ、伝えるんだ。クラスメイト、みんなの目を見て。

「ありがとう。」

《作品の意図》

血の繋がった父をもたない少女・あんずは自分と似た境遇にある泉としか本音で話せない。過去に父がいなかったことを可哀想と言われ、心を閉ざしてしまっていた。誰にも可哀想なんて言われたくない、だから、もう話さない。そうすればあんな言葉言われぬ。しかし、嵐がやってくる。クラスメイトに父のことを全て知られてしまい、声を荒げてしまう。全部嫌になったが、母の優しい言葉と泉の存在が、あんずの心を動かした。短学活時に思いの丈を素直に伝え、初めて本当の自分を見せた。心配もあつたがクラスメイトは本当の自分を受け入れてくれ、思いを言葉にする大切さに気づくことができた。

この作品は自分の体験をもとに書きました。テーマは、思いを形にする大切さです。思いは形になってこそ意味を持ち、人の心を動かすことができると思つたからです。

《作品の寸評》

主人公は中学三年生の高坂あんず。あんずは、幼い頃に父親は亡くなつたと聞かされて育つた。今の父親とはうまくいっていない。そのあんずの気持ちを分かってくれるのが親友の末秋泉だ。泉も一人親家庭なのだが、あんずと同じく家に居場所がないと思つている。そういう境遇をクラスメイトから「可哀想」と思われていることが、あんずには辛い。

「いつの時代でも噂話とは美味しいもので。何の変哲もない日常に飽き飽きして……、余計他人の不幸、甘い蜜を求めろ。」、「『可哀想』という言葉は、言つた本人の自己満足でしかない。」等、葛藤する主人公の内面がよく描かれ、筆者の表現力の豊かさを感じさせる。あんずは、クラス中に広まつた噂に傷つきはするが、その辛さを克服しようと勇気を

「昨日は、いきなり怒つてしまつてごめんなさい。私には、みんなが知つているとおり血の繋がった父はいないの。でも、私は今そんなこと気にしていない。悲しさもあつたけれど昔は昔。今は幸せです。だから、可哀想なんて言葉、聞きたくないなと思つてます。私は自分のことを可哀想だと思つてないし大切な人がたくさんいるから、いいの。」

みんなはただ、話を続ける私を静かに、真剣に見つめている。分かつてもらえるよね。私のこと、受け入れてくれるよね。心配はあるけれど。

「面倒くさくてごめんなさい。でも、これが私なの。こんな私でよかつたら、どうかこれからもよろしくお願いします」

並べた言葉たちに、間違いはない。深く、深く一礼して自分の席に戻る。思つていることを素直に伝えられた。みんながどう受け止めたのかはわからないけれど、これでいい。軽く目を閉じて開くと、泉が私の胸に飛び込んできた。

「あんず！よく頑張つたね」泉のその言葉を皮切りにクラスメイトたちが私に駆け寄ってくる。

「ごめんね、分かつてあげられなくて」と謝る者もいれば

「本当のあんずとも仲良くしたいな」と手を握ってくれる者、

「しつかり伝えてくれて、ありがとう」と言つてくれる者。その言葉が心に柔らかく響いて、涙が溢れてきた。

「ありがとう……っ、ありがとうっ」

嗚咽を漏らしながら、それでも本当の笑顔で私はひたすら感謝の言葉を機関銃のように言い続けた。この日、私は気づくことが出来た。思いを言葉にする大切さ、人間の優しく温かい心。そして、本当に自分を受け入れてくれる人はたくさんいること。私はすべてに感謝し、もう一度だけみんなに伝えた。最高の笑顔で

振り絞ってみんなの前で話そうと決意する。思いを言葉にすることで人に受け入れられるということを、自らの行動によって体得していく。母親のあんずへの愛情も読後安堵感を与えてくれる。物語を通して、「可哀想」という言葉で当事者とは距離をおき、自己保全の優位性を確保し、そこで思考停止してしまいがちな私たちに率直な疑問を投げかけている秀逸な作品である。

(審査員／溝 井 勇)